The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	イメージの教育思想史
Author(s)	渋谷, 亮
Citation	大阪大学教育学年報. 2006, 11, p. 45-56
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5546
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学教育学年報　第11号
Annals of Educational Studies Vol. 11

イメージの教育思想史

渋谷　亮

【要旨】

視覚は教育という営みのなかではどのような役割を担ってきたのだろうか？この問いは視覚的なものがますます浸透しつつある今日において重要なものである。コメニウスは知ることは見ることによって始めなければならないと考えていた。それゆえ彼にとって観察は教育の重要な構成要素であった。とはいえ19世紀以降の視覚をめぐる言説・実践の布置において、見ることは知ることであるより錯視、幻視と深く関わり、身体の動揺や痙攣として経験されてきたのではないだろうか。近代化とともにもたらされたこうした視覚の様式は見ることと教育の関係を変えるものであったといえる。だとすれば近代において見るとはどういうことであったのか。そして視覚と教育の関係をどのように考えることができるのだろうか。

1　はじめに

A・デューラーの『横たわる裸婦を描く男』は男が遠近法を用いて裸婦を描いているところを版画にしたものである。男は女の裸体に視線を向けているが、彼と女の間は遠近法の窓枠たるヴェロによって遮られている。ヴェロは男の視野を限定し、見えるものを一枚の像へと変える役割を果たしている。男の眼は幾何学的点、しかもたった一つの不動な点へと還元され、その視線は幾分冷淡なものに見える。男は女を計測し、描き写すことで客体化する。そこにおいて世界は厚みを失い、理性と幾何学的形式によって検閲され、彼の眼に写し取られる。

はたしてこの男のまなざしは何を望んでいるのだろうか。その石化する視線によって世界を客体化することか、あるいは目の前のヴェロを取り払い世界のただ中に飛びだしていくことか。見るものと見られるものを遮る隔たり、この隔たりによって彼は安全な場所を確保し、超然と世界を眺め把握することができる。しかし彼はこの隔たりに苛立ち、観察主体としての自らの位置を失うことを顧みず、横たわる裸婦と触れあうことを望んでいるのではないか。

カントが主体と事物の隔たりを定式化して以来こうした隔たりを縮める努力がなされてきた。事物それ自体の直接経験が望まれるときしばしば視覚は非難の対象になる。何かを見るためには、見るものと見られるものとの間に距離が必要だからである。例えばE・クック、F・チゼック、V・ローウェンフェルドといった美術教育の実践家、理論家は目を閉じること、そして想像することや触れることを重視した。彼らは視覚的なものを遠ざけることによって主体と事物との隔たりから脱することを試みたのだと言える。

主体と事物の隔たり、この隔たりをどのように位置づけ、これとどのように取り組むかは教育学にとって課題の一つである。今井康雄は経験の教育学的含意を検討するその試みにおいて「教育－何のために」と題されたT・W・アドルノとH・ベッカーの対談に触れている。この対談では経験からの疎外が「教育の現代的条件」として問題化されている。アドルノによれば、「今日われわれが直面している最も深刻な問題」とは主体と事物との間に「ステレオタイプの層」が割って入るようになったということである。この「ステレオタイプの層」によって事物を本来的な姿において経験することが不可能になっているのだアドルノは言う（今井 1998, 167-169）。

「ステレオタイプの層」の典型として見るものと見られるものとを隔てる遠近法のヴェロを考えることができる。ヴェロはその碁盤の目を通して観察を規定し、合理化する役割を果たすのである。この「ステレオタイプの層」によって経験が貧しいものになっているのだとして、私たちが目指すべきはこうした隔たりをなくすことでもなければ、これを前にして眼を閉じることでもない。アドルノは耳の経験に関してではあるが、私たちの指標となるべき言葉を書いている。「演奏のへだたりを脱して直接的な生の連関の中に呼び戻そうとする努力にはどうしようもない救いがたさがある」（アドルノ 1996, 266）。それゆえ私たちは次のように問うことから始めたい。私たちにとって見ること、観察することは見るものと見られる

ものとの間にはたしてどのような隔たりをもたらすものなのだろうか。

近代社会を基礎づける視覚モデルはすべてを監視し管理する俯瞰的まなざしであるということがこれまでしばしば指摘されてきた[1]。世界を俯瞰し所有するまなざしは見るものと見られるものの間に支配する者とされる者という非対称関係を造り出し両者を隔てる機能を持つとされ、今日では極めて評判が悪い。とはいえ近代社会にとって見る行為は常に世界を俯瞰するまなざしであったというわけではない。近年の視覚文化論が明らかにしたように、見るものが世界の内に巻き込まれてある、そのような視覚の形式が19世紀以降近代社会の中心に組み込まれていったと考えることができる[1]。だとすれば俯瞰するまなざしと世界の内に巻き込まれてある視覚、これら二つの視覚の形式がどのように連関しているのかを把握する必要がある。

本論はこのような観点から近代社会の視覚のあり方を検討し、さらに教育と視覚との関係を分析する試みである。この作業を通じて、教育と視覚の関係に批判的視点を導入することが本論のねらいである。

2 視覚の系譜学

2－1 群衆の中の観察者

人口の過度な密集、資本主義化と工業化、19世紀から20世紀にかけて都市の外観は一変した。その結果として多様かつ過剰な刺激の経験がもたらされた。「急速に押し寄せてくる変化するイメージ、一瞥で把握できるシャープな断続性、猛烈な勢いで飛び込んでくる予想外の印象」（ジンメル 1998, 270）とG・ジンメルは述べている。都市は「刺激の殺到」（B・シンガー）する場になったのである。この新たな条件下において観察のあり方も著しく変化することになった。そこにおいて見ることは幻視や錯覚と結びつき、身体の動揺として感じられていたのではないだろうか。

W・ベンヤミンはボードレールに関する論考の中で、群衆を描いた二つの著作、E・T・A・ホフマンの「従兄の隅窓」とE・A・ポーの「群集の人」を比較している。「従兄の隅窓」の従兄は足が麻痺しており、そのため群衆の中に入っていくことができない。彼はオペラグラスによって集合住宅の窓から群衆を超然と眺めるだけである。それに対してポーの小説における観察者は「ある魅力に負けて、ついには群衆の渦の中に飛び込んでしまう」（ベンヤミン 1995, 447）。ポーの観察者は群衆の中をあてどもなくさまよう遊歩の人である。ホフマンの観察者とポーの観察者、彼らは観察の二つのあり方を示している。一方（ホフマンの観察者）は群衆から距離を取り、固定された一定の観点のもとで全体を把握する。彼は安全な場所から悠然と観照する傍観者である。他方（ポーの観察者）は群衆を傍観者として眺めるのではなく、群衆の渦中に自らの身体を投げ出す。

19世紀において都市の交通空間は刺激と情報の充満した場であった。大衆化した乗り合い馬車、街頭を駆けめぐる様々な音、そして群衆。群衆の中に飛び出したポーの観察者はこのような雑踏の渦中に身を投げだすのである。そこにおいて視覚経験は全く新たな様相を呈する。ベンヤミンは次のように書いている。「大都市の交通によってもたらされるような、視覚経験が登場した。大都市の交通の中を歩いてゆくことは、個々人にとって一連のショックと軋轢を生み出す。危険な交差点で、神経刺激の伝達がバッテリーからの衝撃のように、次々と体をつらぬく」（同上 450）。

都市の交通空間において様々な刺激と情報が衝撃（ショック）として襲いかかる。それゆえ人々はこれらのショックから身を守り、瞬時の判断によって変化する状況に対応しなければならなかった。ポーの小説における通行人たちは「理由なしに目を四方八方に配」っているとベンヤミンは言う（同上 450）。彼らはいつ襲いかかるかわからない衝撃から身を守るため、外界の刺激に翻弄され、自らの身体を統御することができないのである。このような人々は悠然と観照する者ではありえない。ショックの危険にさらされ、多様な刺激と情報に身を震わせ、時として眩暈や痙攣にとらわれる。ひしめき合う雑踏の中を歩く者は、対象との距離を放棄し運動する自らの身体において世界を経験するのである。

M・ジェイは19世紀末以来運動感覚を刺激する遊戯が登場し、「みる者とみられるものの隔たりを縮め、それまで、世界との感覚的媒介として支配的な役割を果たしていた〈観照する目〉からその王座を奪った」（ジェイ 2004, 155）と指摘している。例えばジェットコースターのような発明は衝撃と危険という新しい

センーションを生みだし、初期のアトラクション映画は「受け身の目というより、本能的に興奮する身体、時にはリビドーを刺激され、また時にはひどい恐怖にされされる身体を生み出すものだった」(同上158)。ジェイはこうした娯楽を観照するまなざしから「運動感覚体制への移行」を押し進めるものとみなしている。興奮する身体は運動感覚をともなう神経刺激に対してその身体において反応する。そこでは見るものの超然とした自己意識は崩れ去り、見るものと見られるものとの境界は曖昧なものとなるのだ。

都市の雑踏の中を歩く者の経験とはすでにこのような興奮する身体の経験であったにちがいない。人々はジェットコースターに魅了されるように群衆の中を歩くことに魅了されたのではないだろうか。ベンヤミンは群衆が陶酔をもたらす麻薬のようなものであり、「倦怠に対する特効薬」であったとしている(ベンヤミン 1994, 174)。群衆の中を歩く者は自らのその傷つきやすい身体を危険にさらすと同時に、身体の興奮と意識の融解を経験するのである。そこに深い陶酔が見いだされたのだと言える。

見るという行為は様々な文化的言説・実践が織りなす社会平面としての「視の体制」によって規定されていると考えることができる。もし興奮する身体にもとづいたこのような経験が19世紀以来近代の「視の体制」に組み込まれていったとするなら、その存立平面としての「視の体制」とはどのようなものなのだろうか。以下ではこの問いに答えるためにデカルトの視覚論と近代の視覚論を比較検討していく。

2－2　私は眼を閉じ、耳をふさぎ～デカルトの視覚論～

17・18世紀は魔術的なイメージが氾濫した時代であった。M・フーコーはこの時代を「人をあざむく感覚の時代」と呼んでいたが、この時代に好まれたのは人を欺く視覚の戯れであり、幻惑的な視覚経験であった。それゆえ視覚的図像は時として真実を隠蔽する曖昧なものとして不安や嫌悪の対象となった。視覚的なものへの懐疑は見えるものが対象それ自身とは異なるという意識の現れでもある。この「人を欺く感覚の時代」にあって、R・デカルトの思索は見えるものに対する懐疑から出発し、同時に視覚の確かさを基礎づけようするものだったと言える。

D・ジュドヴィッツが指摘しているようにデカルトは感覚を欺く光学装置との緊張関係のなかで「類似」とは無縁な自らの視覚論を作り上げた(Judovitz 2001, 65-66)。われわれが見ているもの(視覚印象)は見られている対象そのものではなく、両者の間にはいかなる類似も存在しない、これがデカルトの議論の前提である。デカルトにとって、視覚印象の産出を「類似」に基づいて把握することは、対象における「眼に見えるもの」それ自体が眼の中に滑り込み、脳へ伝えられるという伝統的な説への接近を意味した。それゆえ彼は類似を拒絶することによって見る主体と世界との眩暈を起こすような直接的関係を遮断し、観察者と世界の切断を徹底的に推し進めたのである。ではデカルトはどのように視覚印象の形成を把握しているのだろうか。

デカルトよれば空気(あるいは透明な物体)の運動・作用である光が視神経と接触し、それによって視神経が振動する。その振動が脳に伝搬され脳のある部分(松果線)に像を刻み込む(デカルト 1973a,147)。ここで重要なのは脳に刻み込まれた像(この像は視覚印象ではない)ではなく、脳内に伝搬される振動である。視神経の振動によって脳のある部分(松果線)に多様な振動が生じる。精神がこの振動を視覚印象へと変換するのである(デカルト 1973c,182-183)。

デカルトにとって身体は振動を伝搬する受動的物質に過ぎない。最終的に視覚印象を形成するのは精神であり、ほとんど莫大なまでの権能が精神に与えられている。「見るのは魂であって、眼ではなく、しかも直接にではなく、脳を介してしか見ない」(デカルト 1973a,153)。デカルトによれば精神は言葉から意味を導きだすように、視神経の運動から視覚印象を導き出す(デカルト 2001, 256)。それゆえ外的対象と視覚印象の間に直接的な関係や類似は存在しないのである。

とはいえデカルトの議論には極めて重大な欠陥があるのではないだろうか。デカルトにあって見る主体は精神として外的世界から隔絶している。そうであるなら視覚印象は精神が恣意的に産出する主観的な幻想以外の何ものでもない。これこそデカルトがその方法的懐疑の中ですでに仮定していた状態である。デカルトは『省察』のなかで感覚への懐疑を徹底し、今－ここにある自らの身体すらも信じることができないと言う。そして彼は次のように述べるのである。「今私は眼をとじ、耳をふさぎ、あらゆる感覚をしり

ぞけよう」(デカルト 1973b,51)。デカルトは方法的懐疑によって感覚的なもの全てが主観的であると仮定するのである(小林 2003, 9-10)。そして彼は曖昧で不確かな「暗闇」の中で、それでも確かなものとして見いだされる純粋な精神、つまり「思考している我」としてのコギトを見いだす。

デカルトはこのコギトを頼りにして神の存在を確証するのだ。デカルトの思索においてこの神はもはや不合理な欺きはないという確信の源泉として認識の確固たる基盤となる。そして曖昧な感覚に依存することのないこの確信をデカルトは「自然の光」として称賛する。この「自然の光」によって、感覚印象の確かさ、つまり、それらが真理の幾分かを表すものであるということが保証されるのである(デカルト 1973b,121-122)。

見る主体を孤立した主観性として位置づけようとするデカルトの思索は、世界の外に、そこから世界を把握するための精神=意識という不動の視点を確保する試みであると言える。だがこの試みは視覚印象の主観化をもたらす危険がある。それゆえデカルトは「自然の光」を見いだすことによって、視覚印象を主観的なものではなく、客観的なものとして措定するのだと考えることができるだろう。デカルトにとって「自然の光」は主体の外部に位置し、全てを見るいわば神のまなざしなのである。このまなざしによって見る主体は孤立した主観性としての精神=意識において、外的対象を把握することができるのだ。「暗闇」の中で自己に閉じこもるコギトにおいて、外的世界はその存在すら疑わしいほどに曖昧である。「自然の光」(=神のまなざし)はこの曖昧さを隠蔽することによって、世界を意識の明るみへともたらすのである。

2−3 見る身体1〜19世紀の視覚論〜

J・クレーリーは19世紀以降の感覚・知覚を巡る言説・実践において、視覚印象を産出するプロセスが身体に埋めこまれるようになると指摘している。換言すれば、世界のうちに存在する身体、つまり空間と時間のうちに限定された身体へと視覚印象の産出機能が還元されるのである。この移行を決定的に推し進めたのがY・ミュラー、H・v・ヘルムホルツらの解剖学的・生理学的言説であった。彼らの議論はデカルト的枠組みを換骨奪胎するものだった。以下では主としてクレーリーを参照し、19世紀における視覚の身体化を検討していく。

ミュラーは1833年から出版された『人間学生理学教本』において「特殊神経エネルギー説」を導入する。クレーリーによればミュラーの主張は「ある同質の原因(たとえば電気)が、様々な感覚神経に全く別個の感覚を生じさせる」というものだ。つまり「視覚神経に流された電流は光の経験を生み出し、皮膚に流されると触覚を生じさせる」(クレーリー 1997,136-138)。ミュラーはこれによって刺激と感覚印象の関係の恣意性を定式化したのである。ミュラーの影響下で仕事をしたヘルムホルツも「直接知覚しうるのはいつも神経興奮(つまり、効果)だけであって、決して外的対象そのものではない」(ヘルムホルツ 1996, 120)と述べている。このように視覚は外的世界から隔絶した主観的なものとして規定された。しかしそれは視覚印象の産出が自律的な精神にもとづくからではなく、身体に分散した神経系の連関にもとづくからであった。

ミュラー、ヘルムホルツを初めとする19世紀の科学的言説において視覚印象の産出過程は、外界における不可視なエネルギーの集積を神経システムとしての身体が変換する過程として記述される。これに関してG・Beerは「不可視なものは、視界の射程の外に存在するのではなく、可視的なものがそこから断続的に現れるエネルギーのシステムとして新たに理解された」(Beer 1996,85)と指摘する。つまり光はエネルギーとして存在し、光=エネルギーが神経系の密集する不透明な混合器官である眼の中に複雑な興奮プロセスを引き起こして、知覚へと到達するのである(Crary 2005,153)。このように視覚は光とエネルギーの集積である世界と絡まり合う身体に基づいて再構成された。

デカルトにとって眼は振動を伝搬する受動的物質であり、精神こそが能動的なものであった。精神=意識は世界の外部に位置する不動の視点だったのである。しかし19世紀の視覚をめぐる言説において、眼は身体に所属する厚みを持った器官、それ自体が視覚印象の産出に関わる能動的器官であり、視覚印象を産出するのは世界の中に埋めこまれた能動的身体のダイナミックなプロセスとなった。それゆえ観察は世界の外に位置し、不動の一点から世界を観照するというものではありえなかった。眼は落ち着きなく居場所を探し求める運動器官であり、知覚されるものは本来的に断片的かつ流動的なものだったのである。へ

ルムホルツは視覚の不安定性を執拗に記述しており、また当時の解剖学的言説に影響を受け、芸術論を展開したK・フィードラは次のように述べている。「視覚意識の中に可視的なものとして知覚されるものは何らまとまりのない断片なのであり、一次的な移ろいゆく現象なのである」(フィードラ 1979, 105)。

デカルトにあって見られるもの(事物それ自体)は意識に無媒介に与えられるものではなく、神の超越的まなざしを介して与えられた。しかし19世紀においては、外界と意識とを媒介するのは不透明な身体、誤りやすく傷つきやすい身体であった。フーコーが指摘したように、19世紀において身体は外的環境から自律しながら外的環境なしには存在しない固有の意味で生命体であったように思われる。それゆえ見えるもの(視覚印象)は誤謬と不可分であり、根本的に不安定なものだったのである。

2－4　見る身体2～不毛な経験～

19世紀の言説は視覚を世界の内に位置する身体に基づいて再構成することで、見るもの(身体)と見られるもの(世界)の隔たりを縮めるものだったと言える。同時にこうした視覚の身体化は視覚を徹底的に不安定なものとして規定するものでもあった。特に意識という観点からすれば、見るものと見られるものは不透明な身体によって隔てられており、それゆえ意識は対象の実在すら確信することができない。

実際、ヘルムホルツにとって視覚印象と対象それ自身との関係は恣意的であり、外的対象が存在するという根拠すら知覚の内にもたらされるものではなかった。そのため彼は外界の対象が存在するという確証を因果律に求めた。原因なくして結果はあり得ないのだから感覚の原因である外界は存在するというのだ。さらにヘルムホルツはこうした推理が無意識においてなされると考えた(ヘルムホルツ 1996,120)。しかし彼にとってこの無意識的推理は先天的にも経験的にも何ら根拠を持つものではなかった(エルトマン 1996,14-19)。

ヘルムホルツの研究は見る主体を身体の内に位置づけるものであったが、しかし彼は視覚の身体化がもたらす帰結、つまり視覚が徹底的に不安定なものであるという帰結から逃れるために、無意識的推理という不十分な仮説を立てたように思われる。ここにおいて視覚(感覚)の安定性を基礎づけることが重要な課題となる。W・ディルタイはヘルムホルツの説に対し、推論を経ることなく意識の統一において事物の存在が全体として与えられると主張している。「生の哲学」や「意識の流れ」を主張する立場によって、意識を観念の集合や束として捉える連合主義、あるいは感覚や刺激を意識の全体性から切り離された個別的断片として捉える通俗的な心理学(ヘルムホルツの議論は結局の所、このような連合主義や心理学と結びついたものであった)は批判の対象となった。そして観察主体と客体(＝対象)が絡み合う根元的な場として意識が立ち現れる過程を記述する試みがなされたのである。

これらの試みはデカルトと比較するなら、超越的まなざしを措定することなく、また厚みをもった身体を介することなく、意識における世界の把握を基礎づける試みであったと整理することができる。意識において直接世界を経験するような開かれを見いだすことが要請されたのである。だがG・アガンベンがその卓抜な経験論で示唆しているように「生の哲学」を含む純粋経験を記述する試みは、そのような経験がデカルト的意識＝主体の残滓でしかないがゆえに失敗を運命づけられているのだと言える(Agamben 1993　特に35-36)。

それどころかそれらの試みは視覚の身体化という新たなに進行している事態から目を背け、これを隠蔽するものだったのではないだろうか。ベンヤミンが「生の哲学」における意識の純粋経験という構想が「大工業化時代の不毛で魅惑的な経験」(ベンヤミン 1995,421-422)に対して背を向けるものだと書いたとき、彼はこのことを完全に把握していたのだと言える。不透明な身体の内に埋めこまれた視覚にとって、見るものと見られるものの隔たりが縮められるのは意識＝主体においてではなく、身体においてであり、より正確に言うなら、意識＝主体が融解した身体の神経興奮においてなのである。

クレーリーは19世紀において生じた視覚の身体化とそれにともなう視覚の不安定化を、流動化と解体という資本の論理によって規定された近代化のプロセスの一部として捉えている。このような変化は決して言説レベルにとどまるものではなく、実践レベルにおいても浸透していたと考えることができる。すでに2-1で検討した都市の雑踏と群衆の中での視覚経験はまさに身体化された視覚の経験だったのだと言えるだろう。またパノラマ、ジオラマといった幻惑的娯楽装置、高速の乗り物など19世紀に現れた様々な

現象は過剰な刺激に翻弄される身体の経験と結びついていた。近代社会の視覚を巡る言説・実践の編成において、その中心に位置するのは不透明な身体なのである。以下ではこれまでの検討を踏まえて視覚と教育の関わりを分析し、イメージの教育思想史の記述を試みていきたい。

3 教育と視覚

3－1 世界図絵～コメニウスにおける視覚の人間形成論～

「人を欺く感覚の時代」である古典主義時代にあって視覚的図像を中核にすえた教育的試みが存在する。J・A・コメニウスの『世界図絵』である。この著作では、様々な事物が図絵によって視覚的に提示され、これを通して事物の名を覚えることができる。『世界図絵』の冒頭でコメニウスは「あらかじめ感覚の中に存在しないものは,何ごとも理性や言語の中に存在することはありません」(コメニウス 1988,1) と述べている。知識を獲得するためにはまずそれを感覚によって把握しなければならない。それゆえ彼は図絵の観察を学習の出発点においたのである。

では『世界図絵』の図絵とはどのようなものだったのだろうか。S・アルパースによれば、『世界図絵』において「個々の事物は、実用を目的としてここに描かれているのではなく、注意深い眼差しのために描かれている」(アルパース 1993,167)。つまり図絵は単に見ること、それも注意深く見ることを目的として描かれているのである。17 世紀オランダにおいて「知識は目に見えるものであり、獲得することのできるものである」(同上 133-134) というベーコン主義のもとで、注意深い観察が重視される傾向にあった。こうした時代の思潮の中でコメニウスは見るという行為を丹念に吟味し、ひとつの事物を様々な観点から眺めること、細部にいたるまで注意深く観察することを強調した (同上 166-167)。コメニウスにおいて重要なのは事物のありのままに目をそそぐことであり、「注意深い眼差し」、これによって事物の知識を吸収し、理解することができるとされたのである。

しかし『世界図絵』の試みをこのように把握するだけでは十分ではない。K・モレンハウアーによればコメニウスにおいて直接的な感覚データはそれ自体で意味を持つものではない。感覚データが「意味あるものとして知覚されるためには、前もって、あるいは少なくとも感覚的知覚とともに、何かそれ以外のこと」(モレンハウアー 1987, 66)、つまり感覚データに意味を付与する何らかの秩序が生起しなければならないのである。コメニウスは図絵を直接的な感覚データとこのデータに意味を付与する秩序の媒介として位置づけたのだとモレンハウアーは主張する。つまりコメニウスの試みに賭けられていたのは、いかにして観察が知識獲得の源泉として有意義なものになりうるのかということであり、『世界図絵』とは世界の認識可能性を基礎付ける試みなのである。

そもそもコメニウスにとって彼の時代は認識の混乱という問題に直面した時代であった。北詰裕子によればコメニウスは自らの時代を「言語が事物に即していない状況」と考えていた。そしてコメニウスの試みは事物と言語が正しく結びついたあるべき姿を示し、秩序を有した本来的な事物の姿を示すものだったのである (北詰 2001,90-91)。

本来的で原初的な事物への志向はコメニウスだけに特有のものではなく、17・18 世紀の古典主義時代に幅広く見られる。M・フーコーは古典主義時代において事物と言語が結びついた原初的な一覧表(タブロー)が前提されていたと述べている。それはあらゆる諸存在が、あるべき名前を与えられて、あるべき場所に鎮座する、諸存在の理念的一覧表である。古典主義時代にとって、今そこに存在するあらゆる事物はこのタブローが粉砕され、寸断された形で散らばったものであった。それゆえ事物を正しい名前で呼び、その正しい場所を定めることこそ、古典主義時代の課題だったのである。逆に言えば、このタブローのもとではじめて事物を分類し、秩序づけ、その名を呼ぶことが可能となる。理念的タブローは諸存在を認識するための可能性の条件をなしていたのである。

コメニウスの試みとはこのような理念的タブローを具象的な形へと結実するための努力であったと考えることができる[iii]。だとすれば『世界図絵』は理念的タブローを可視化することによって世界の認識可能性を基礎づける試みではないだろうか。コメニウスは混乱した世界を認識可能なものとして措定するために、秩序を有した事物の原初的姿を示そうとしたのである。こうした観点から

すればコメニウスの試みにおいて図絵は事物の観察に意味を付与する秩序を可視化するのであり、観察の条件を成すものである。

それゆえコメニウスは事物を丹念に観察し、ありのままに眺めることを主張しながら、実のところあまり多くのものを見ようとしなかったと言える。なぜなら観察はそれ自体で知や真理へと導かれるものではなく、観察者の視線は理念的タブローを可視化した図絵によってあらじかめ裁断されなければならないからである。図絵にもとづいてはじめて観察が有意義なものとして立ちあがるのだ。デカルトは外的世界から「暗闇」の中に撤退することによって、外的世界との正しい関係を回復しようとした。同様にコメニウスの試みにおいても、観察者は感覚の不確かさに支配されたこの世界から書物の内に撤退することで、世界の不確かさに惑わされない、見る主体としての確かな位置を確保する。そして見る主体は理念的タブローのもとで世界との誤謬のない関係を取り結ぶことができるのだ。

コメニウスは『世界図絵』の冒頭でこの著作において「絵は目に見える世界中の全てのものを描いたものです」（コメニウス 1988,2）と述べている。「世界中の全て」の完全な表象を目指す『世界図絵』が想定していたまなざしとは、世界の外ですでに全てを見ている神のまなざしであると言える。コメニウスは「全てを見通す神の眼と全てを支配するその手」（同上 163）と書いている。コメニウスの言う「世界」とは神のまなざしに映った表象可能な理念的タブローの世界にほかならない。

神のまなざしは見る主体の外部から観察の正しさを保証し、見えるものを客観的で正しいものとして定立する。『世界図絵』はこの神のまなざしのもと、混乱した世界を認識可能なものとして措定しようとしたのである。世界との直接的関係を否定し神のまなざしを措定することによって、世界の正しく完全な把握へと向かうコメニウスの試みはデカルトの試みと完全に同型の構造を有している。彼らの思索は観察可能な世界を定立し、世界の開かれを可能にする試みなのである。

３－２　監視と教育～教育的眼差し～

ところでモレンハウアーは『世界図絵』を、大人の世界と子どもの世界を注意深く分離し、子どもを書物の内の正しい世界へと隔離する「代表的提示」の試みとして把握している。モレンハウアーによれば、このような隔離こそ近代教育の原型をなす。Ｊ・Ｊ・ルソーはその教育論『エミール』において、無秩序な世界から隔離された子ども（＝エミール）の姿を描きだしている。すでに見てきたようにコメニウスにおいて子どもの隔離は単に子どもを保護するというだけでなく、世界の認識可能性を基礎づけるための戦略でもあった。ルソーもまた世界の観察可能性を保障するために教育学的装置を仕掛けるのである。とはいえルソーの組み立てた装置は絵本というコメニウスのそれよりいっそう手の込んだ装置であった。

森田伸子によればルソーは子どもに不在のものを提示するべきではないと考えていた。ルソーにとって現に存在する事物のみが自然であり、不在の事物を指し示す記号は不自然なものとして子どもから遠ざけらる必要があったのである（森田 1999, 38-39）。それゆえ『世界図絵』のように書物という形式で事物のあるべき姿を提示することはルソーにとって必ずしも適切な方法ではなかった。書物は記号によって構成されており、事物の世界を生きる子どもには不適切なものだからである。したがってルソーにとって正しい観察とは自然の事物が現にそこに存在する姿をありのままに観察することであったと言える。こうしたルソーの立場は例えば描画に関する記述に現れている。描画を「眼を正確にし、手をしなやかにするため」の訓練と見なすルソーにとって、事物をありのままに観察することは知識を獲得する主要な方法だったのである（ルソー 1962, 241）。

ここで『エミール』の提示する教育構想が教師（教師である「私」）に何を課すのか考えてみよう。自然の事物による教育という構想は教師を一人の検閲官として位置づける。教師は子どもに提示されるべき世界を管理し、事物の無秩序を子どもの眼から遠ざける役割を担うのである。『エミール』が示しているのは、コメニウスのそれとは異なる、しかしよりラディカルな「代表的提示」である。教師は子どもの周囲にある世界そのものを再構成し、事物のタブローを現に存在するものとして提示しなければならない。このようにして再現された空間において観察は知識の源泉となる。

だとすればこの空間を監視し合理化する検閲官としての教師は子ども＝エミールにとって全てを見る神のまなざしを有する存在だと言えるだろう。このまなざしこそ子どもの観察可能性を担保し、それゆえに

教育の可能性をも基礎づけるものなのだ。とはいえそこでは神のまなざしという無限のまなざしが、教師という有限な人間に局所化されている。このとき、神のまなざしによって開かれる古典主義時代の空間はすでにほころびを見せ始めているのではないだろうか。

『エミール』から読み取ることのできる教師＝監視者のまなざしは、教育活動の秩序を維持するための「教育的眼差し」であると言える。Ch・ヴルフによれば「授業時間内に〈教育的眼差し〉によって継続的に観察が行われるようになった。この教育的眼差しは、観察を比較し、分類整理し、規則を尊守させることを目指す」（ヴルフ 2005,63）。監視するまなざしは「懲罰的、強制的な機能」を有し、それゆえ教育と深く結びついていたのである。

フーコーによれば監視技術は、古典主義時代が進むにつれゆっくりと発展してきた。フーコーは監視が機能する際の、視線の多様性、種別性、階層性を強調している。実際、古典主義時代において監視する視線は単一の視線ではなかった。それは様々な役割によって種別化された多様な視線であり、それゆえこれらの視線を有機的に連結させる必要があったのである。こうした監視技術は教育実務の中にも浸透し、主要な機能を果たしたのであるが、そこにおいて全てを見る単一のまなざしが局所化されることはなかった（フーコー 1977, 175-181）。全てを見通すただ一つのまなざしという形象は18世紀末にJ・ベンサムによるパノプティコン（一望監視装置）の構想において「政治的理想」として具象化される。18世紀末以来、パノプティコンやパノラマをはじめとして俯瞰的まなざしを実現する様々な装置が考案された。それらの装置は不動の一点から全てを見る主体という近代の理想と結びついている。とはいえ局所化された超越的まなざしは不完全なものではないだろうか。デカルトやコメニウスにおいて観察主体の外部に位置し、観察の確かさを保証していた超越的まなざしは、監視者（＝主体）の内に移行することによって不完全なもの、絶えず脱臼される可能性を有したものへと転化するのである。だとすれば全てを監視し管理しようと試みる「教育的眼差し」は必然的に機能不全に陥ることになる。

山名淳によるドイツ田園教育舎の分析は「教育的眼差し」における機能不全の機能という逆説的なあり方に着目したものである。H・リーツの田園教育舎の試みは新教育運動のなかでも中心的な試みの一つであった。山名はフーコーのモデルを用いてリーツの田園教育舎（特にハウビンダ校）の空間構成を分析することによって、「新教育運動に関与する人々の集合的心性の対応物」として文化の無意識を「教育舎空間」の内に見いだそうとする（山名 2000,265）。

田園教育舎は自然環境と野外活動を重視することによって一見開放的な教育空間を造り出すものであった。とはいえ山名によれば、ハウビンダ校のその中心に位置する主校舎には「ガラス箱」と呼ばれるリーツ専用の小部屋が存在し、野外活動を見通す俯瞰的まなざしが設定されていた（同上 272）。この「ガラス箱」こそ、パノプティコンの中心に対応するものである。山名は、この中心に位置する俯瞰的まなざしが完全なものではなく、それゆえハウビンダ校の構成する教育舎空間は「不完全な〈パノプティコン〉である」（同上 279）と指摘する。「監視の網の目を掻い潜って子供たちはキャンパス外部へと脱出することもできたし、そもそもキャンパス内には監視の行き届かない子ども達のアジトが局在化していた」（同上 275）。つまり教育舎空間には教育的眼差しの及ばない「アジール」的外部が残されていたのである。山名によれば、このような外部は教育的営みの外にあったのではなく、むしろ教育的営みの「存立機制の一部」であった。

教育空間を秩序化する「教育的眼差し」は、統制に対する抵抗の拠点として半ば意図的に監視と制限が緩和された「解放区」を抱え込み、これを教育的営みの一部として管理運用する。そこにおいて「〈侵犯〉と〈懲罰〉のゲーム」が成立し、ダイナミックな教育が展開されるのである。だとすれば、「教育的眼差し」は機能不全を抱え込むことによって機能するのだ。

さらに山名は興味味深いエピソードに言及している。リーツはその晩年「ガラス箱」から気楽な住居に身を移した。彼は亡くなる一月前、馬上で気を失っているところを「ガラス箱」から外を眺めていた彼の後継者によって発見されたという。見る主体であったリーツが見られる客体へと転化するというこの事実（同上 280）こそ全てを見る主体の不可能性を端的に示すものである。そしてこの不可能性の中心に忽然と姿を現すのが不完全で傷つきやすい身体ではないだろうか。

4 パノプティコン

近代社会において超越的まなざしを実現する様々な装置が産み出されてきた。これらの装置は全てを見ようとする主体の欲望を脱臼し、その不可能性を顕わにするものだと言える。しばしばパノプティコンとの関連で取り上げられるパノラマ（ギリシャ語で「全てを見る」を意味する）ｉｖ）において、観者は中央の眺望台から360度の全てを見ることができる。前川修は「移ろいやすい運動的眼差し、これに対応する、断片的刺激との断続的接触」（前川 2004, 117）がこの装置を規定する「表象の力学」であると指摘している。パノラマにおいて像に囲まれた観者は自ら動きつつ見ることを要請されるだけでなく、さらに遠近の感覚を統合することができない。その結果、観察主体は断片的な印象のもとで「近接した諸表象の流れの中に巻き」（同上 115）こまれるのである。19世紀にしばしば口にされたパノラマの並はずれた現実性は、断片へと解体していく視覚印象の流れと、これらの断片を統一的な知覚へ統合していく主体の努力という力動的プロセスがもたらすものであった。こうしたパノラマの知覚形式は不安定な運動する目、つまり身体的視覚に基づいている。全てを見渡すことのできるパノラマのその中心において、見る主体は己の不完全な身体性をさらけだすのである。

そもそも不動の視点からの観察は、注意を集中することによって束の間実現されるにすぎない。ベンヤミンは注意散漫な状態を近代の主要な知覚形式であると考えていたが、身体に埋め込まれた視覚は本来的に散漫なものであり、そして「注意は常に制限されつつ持続し、必然的に散漫な状態へと分散していく力動的な連続体の一部である」（Crary 2001, 289）。つまり近代において不動の視点からの観察は身体化された分散的で流動的な視覚と不可分であって、見るということは絶えざる解体と解体のただ中で定点なしに生起する統合とが織りなす力学によって規定されているのだ。それゆえ全てを見る観察主体はその有限な身体の中にとらわれており、そこから脱することができなかったのだと言える。

フーコーのパノプティコンの分析はまさにこうした力学に焦点をあてたものとして考えることができる。パノプティコンをはじめとした近代社会の監視装置において、全てを見通すその中心は少数者のみが占有可能な例外的空間ではない。「誰でも中央の塔にやってきて監視機能を果たしうる」（フーコー 1977, 208）。とはいえ誰も完全には占有することのできないその空間は不在の中心であると言える。「誰でもできる」が「誰もできない」へと転化するこの装置において、全てを見ようとする主体は「人間」の有限性を刻み込まれている。つまりパノプティコンの中心とは全てを見通し、世界を我がものとする主体の中核に不可視のシミを穿ち、超越者の不在を暴露する限界点なのである。

おそらくパノプティコンは監視者（見る主体）と被監視者（見られる客体）を切り離すと同時に、この装置にとらわれた全てのものに対して見る主体の位置と見られる客体の位置を絶えず往還することを強制する装置なのだ。パノプティコンの中心に位置する見る主体は、そこにおいて全てを見ようとするその欲望を脱臼され、不透明な身体をさらけだし、規律訓練の客体として独房の内に送り返される。他方で独房の中で見られるものは、超越的まなざしへの欲望を扇動されることによって塔の中心を目指す。パノプティコンとはこのように往還を方向付け、規制する装置であり、不透明な身体を絶え間なく産出する装置であると言えないだろうか。一方の極には身体化された視覚（脱主体化される視覚）が、他方の極には超越的なまなざし（全てを見る主体）が存在し、この両極の中心に位置するものは、一方から他方へ（主体化の流れ）、他方から一方へ（脱主体化の流れ）と絶えまなく移行する。おそらく近代社会を構成する「視の体制」はこのような力学によって貫かれているのである。前節の最後で触れたリーツのエピソードをもう一度想起しよう。見る主体であったリーツは死すべき身体へと送り返され、「ガラス箱」から発見される。全てを見る「教育的眼差し」は弱々しい見られる身体となる。

近代の教育空間において、子供も大人も不完全な観察能力、不安定な身体を有する存在として中心化される。フーコーはすでに『臨床医学の誕生』において厚みをもった身体の産出について論じていたが、観察者が埋め込まれた不透明な身体は超越的まなざしへの欲望とその不可能性を通して、絶えず新たに産出されると考える必要がある。このようにして産出された身体は逸脱しやすい身体として管理と監視の対象となり、生徒、労働者、消費者、患者などの形で社会の内に配置される。監視と管理を中心とした規律訓練の様々な働きかけが行われるのはこのような身体を通じてなのである。規律訓練が近代の教育の主要な

形式であり、近代の教育にとってその対象が逸脱しやすい身体であると同時能動的身体であるとするなら、観察者の身体への埋め込みは近代の教育の可能性の条件なのではないだろうか。

5 おわりに

これまで超越的まなざしと身体化された視覚という観点から、近代社会の「視の体制」と視覚と教育の関係を検討してきた。最後に本論ではふれることのできなかったもうひとつの視覚経験について言及しておきたい。ベンヤミンはV・M・ユゴーとC・ボードレールを比較しながら、ボードレールの特殊な性分、つまり群衆の中にあって自意識を失わない性分について言及している（ベンヤミン 1994, 208)。ベンヤミンによれば、ユゴーは群衆のうちに陶酔的に没頭し、そこでは「群衆と個人とを隔てる敷居」は見えなくなる。しかし「ボードレールのほうはその敷居で頑張っていた」(同上 215-216) とベンヤミンは言う。ベンヤミンは群衆を高みから見下ろすホフマンの観察者よりも群衆の中に飛び出していくポーの観察者に共感を抱きながら、しかし群衆と一体化するユゴーよりも群衆のなかで孤独を感じるボードレールを肯定するのである。群衆の中を遊歩するものは世界を運動感覚において経験し、そこでは見るものと見られるものを隔てる距離は無化される。しかしベンヤミンの描くボードレールは「個人と群衆の敷居」に位置していたのであり、群衆の中で見るものと見られるものを分割するその隔たりに自らを保とうする。ここに精神でも身体でもない経験の場が存在するのかもしれない。だがそれはまた別の課題である。

＜注＞

(i) その際持ち出されるのが、パノプティコン、パノラマ、ナダールの空中撮影、塔からの俯瞰的まなざし等である。

(ii) 近代社会の「視の体制」を検討する試みはすでに数多くなされており、本論はこれらの研究のなかでも特にJ・クレーリーの研究を、その枠組みとして参照している。またクレーリーの研究の影響のもとで書かれたと思われる前川修 2004 や大沢真幸の『〈精神＝身体〉のパースペクティブ』なども参考になった。

(iii) 北詰もコメニウスの試みのタブロー的性格を示唆している。だが、踏み込んだ言及はしていない。また北詰はフーコーの言うタブローを一瞥で把握できる一覧表であるとして、書物という形式をとった一覧表と区別しているが、本論はフーコーの言うタブローを理念的なものであると考えている。

(iv) パノラマのより同時代的な分析としてはしばしば参照されるヒルデブラントの『造形芸術における形の問題』の冒頭における分析が興味深い。またパノラマのリアリティについては Schwartz, V R. 1999, 149-176 参照。

＜引用参考文献＞

＜洋文＞

Agamben, G 1993 trans : Liz Heron "Infancy and History" Verso Books

Beer, G 1996 "Authentic Tidings of Invisible things" "Vision in Context" ed: Brennan, T Jay, M Routledge 83-98p

Bolla, P de 1996 "The visibility of visuality" "Vision in Context" ed: Brennan, T Jay, M Routledge 63-81p

rary, J 2001 "Suspensions of Perception : Attention Spectacle and Modern Culture" The MIT Press. ＝岡田温司 監訳 石谷治寛 大木美智子 橋本梓 訳『知覚の宙吊り近代文化』平凡社 2005

Jay, M 1994 "Downcast Eyes" University of California press.

Judovitz, D 1993 "Vision ,Representation ,and Technology in Descarte" " Modernity and the Hegemony of Vision" ed, David Michael Levin Univ of California Pr 63-86p

Schwartz,V R 1999 "Spectacular Realities" Univ of California Pr

＜邦文＞
アドルノ ,T.W 1996 渡辺祐邦 三原弟平 訳『プリズメン』筑摩書房
アルパース , S 1993 幸福輝 訳『描写の芸術』ありな書房
今井康雄 1998 『ヴァルター・ベンヤミンの教育思想』世織書房
ヴルフ ,Ch 2005 古賀直樹 訳 「眼」ヴルフ ,C 編 藤川信夫 監訳『歴史的人間学事典』勉誠出版 54-73 頁
北詰裕子 2000 「J・A・コメニウスにおける事物主義と図絵」『教育哲学研究』vol,84 87-103 頁
クレーリー , J 1997 遠藤知巳 訳『観察者の系譜』十月社
小林康夫 2003 『表象の光学』未来社
コメニウス , J, A 1988 井ノ口淳三 訳『世界図絵』ミネルヴァ書房
ジェイ ,M 2004 谷徹 谷優 訳『暴力の屈折』岩波書店
ジンメル , G 1998 居安正 訳『橋と扉』 白水社
デカルト , R 1973a-d 三宅徳嘉 他訳『デカルト著作集』全４巻 白水社
デカルト , R 2001 神野慧一郎 訳「世界論」『方法序説 ほか』中央公論新社
フィードラ , K 1979 山崎正和 責任編集「芸術活動の根源」『近代の藝術論』中央公論社 61-169 頁
フーコー , M 1974 渡辺一民 佐々木朗 訳『言葉と物』 新潮社
フーコー , M 1977 田村俶 訳『監獄の誕生』 新潮社
ヘルムホルツ , F , v エルトマンB 1996 大村敏輔訳『ヘルムホルツの思想』 ブレーン出版
ベンヤミン , W 1994 野村修 編訳『ボードレール』 岩波書店
ベンヤミン , W 1995／7 浅井健二郎 編訳 久保哲司 訳『ベンヤミン・コレクション』全３巻 筑摩書房
前川修 2004 『痕跡の光学』晃洋社
森田信子 1999 「文明化の過程と『エミール』」森田尚人 宮寺晃夫 他編『近代教育思想を読みなおす』新曜社 28-45 頁
モレンハウアー , K 1987 今井康雄訳『忘れられた連関』みすず書房
山名淳 2000 『ドイツ田園教育舎研究』風間書房
ルソー ,J-J 1962 『エミール 上』岩波書店

Educational Thought and the History of the Image

SHIBUYA Ryo

What kind of roles does the visual play in education? This question is important because at present, the visual permeates our life. Comenius thought that "knowing" should begin with "looking." Therefore, looking was an important component of education according to him. However, in the 19th century arrangement of discourse and practices regarding the visual, looking was probably related to optical illusions and visual hallucinations rather than to knowing. Hence, looking was considered as a disturbance in or convulsion of the body. This aspect of the visual, which is determined by modernity, changed the relationship between the visual and education. What is the looking as disturbance of the body, if so? Further, how can we understand the relationship between the visual and education in modern times?